

田口弘文庫

高村光太郎資料コーナー



東松山市立図書館

田口弘文庫「高村光太郎資料コーナー」は、田口弘氏より東松山市へ寄贈された、高村光太郎関連資料を中心に展示しています。

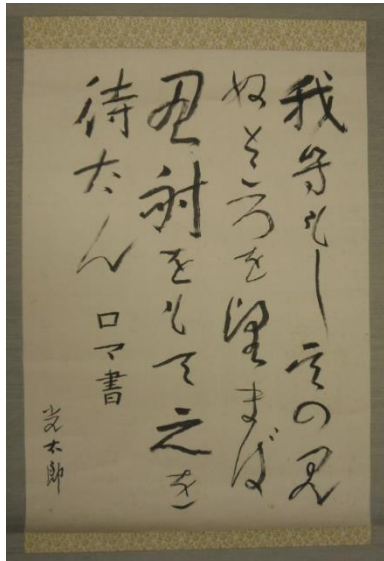
田口 弘 1922年(大正11年)～2017年(平成29年)

1976年から16年半にわたり東松山市教育長を務める。その間、日本スリーデーマーチの東松山市開催や、東武東上線高坂駅前に彫刻家・高田博厚の作品32点が並ぶ高坂彫刻プロムナード【高田博厚彫刻群】の建設に携わる。学生時代より、恩師の影響で高村光太郎に傾倒し、生涯、高村光太郎の研究を続けた。2016年(平成28年)高村光太郎から贈られた書や交流書簡、関係書籍などを東松山市に寄贈した。

高村 光太郎 1883年(明治16年)～1956年(昭和31年)

詩人、彫刻家。彫刻家・高村光雲の長男として生まれる。大正3年、口語自由詩の詩集「道程」を刊行。1941(昭和16年)妻・智恵子との愛の生活をうたった詩集「智恵子抄」を発表。戦後は戦争協力の責任を感じ、岩手県太田村の山小屋にこもり自炊生活をした。アトリエの庭に連翹(れんぎょう)の花が咲いていたことから、命日である4月2日には東京と花巻で「連翹忌(れんぎょう忌)」が営まれている。

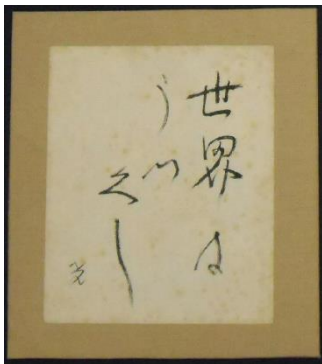
高村光太郎 直筆資料



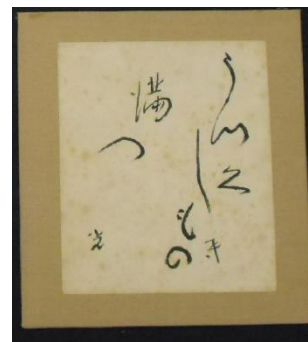
我等もしその見
ぬところを望まば
忍耐をもて之を
待たん
ロマ書
光太郎

「ロマ書」 (昭和 24 年)

聖書の中にあるロマ書から選んだ章句。田口の長男誕生 3 日後に届いた。



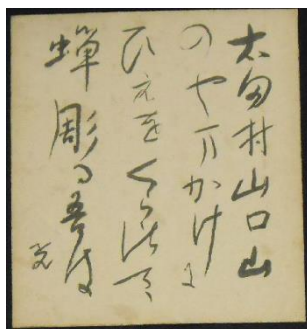
世界は
うつくし
光



うつくしきもの
満つ
光

「世界はうつくし」・「うつくしきもの満つ」 (昭和 21 年)

昭和 19 年、田口が出征する直前に東京の駒込林町のアトリエを訪問した際、高村に書いてもらったものと同じ言葉。最初のもは、戦地で海に沈んだ。現存のもは、戦後、花巻を訪問し、同じ言葉を書いてもらった。



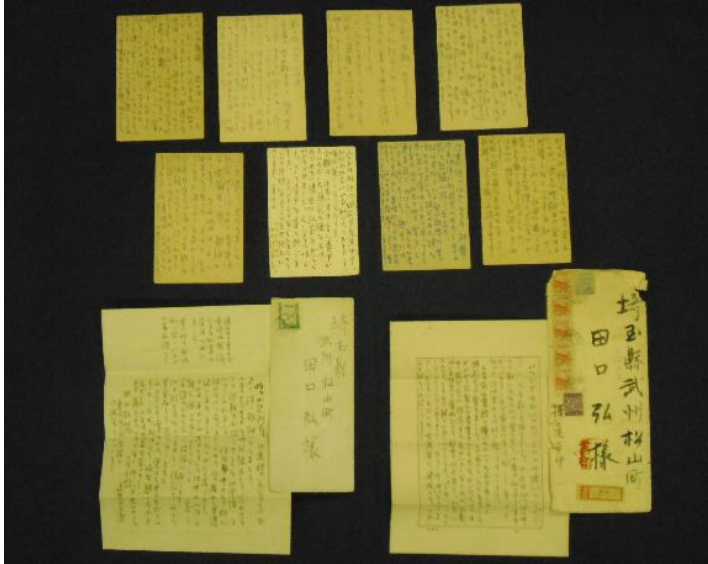
太田村山口山
のやまかけに
ひえをくらいて
蝉彫る吾は
光

「太田村山口山の……」 (筆年不明)

いつ書かれたものなのか書簡等では、判断できないが、高村が世話になった人たちに贈った色紙に同じ句のものがある。

直筆書簡(1946年～1951年)

光太郎と田口の交流の様子がうかがえるハガキ八通、封書二通。封書の封筒は原稿用紙を裏返して作られている。



～ 書簡の内容から ～

光太郎と足のサイズ

昭和二十五年二月十四日

「…小生の足のサイズを御記憶ありて心にかけてこの短靴をお探しくださつた」厚情に心をうたれました、…」

昭和二十六年十二月十五日

「…特大毛糸のクツ下をまことにありがたく存じました。…」

昭和二十八年一月二十二日

「先日は小包いただき、お心こもつた丈夫な大型のクツ下に大喜びしました。」

田口は、光太郎の足のサイズが大きくて靴や靴下などあうものが中々見つからないのを氣遣つて、度々奥さんの手編みのクツ下などを送っていた。

松山名物紫蘇巻

昭和二十四年二月二日

「…松山名物といふ紫蘇巻は昔の味そのままにて…」

昭和二十五年二月十四日

「…例の松山名物のシソまきも、…」

昭和二十六年三月十四日

「…それにあの美味な紫蘇巻一折、感謝いたします。」

昭和二十八年一月二十二日

「…しそ巻も頂戴、今日ではまことに珍しい味のものとて、すこぶつ賞味…」

田口の近所で売っていたという紫蘇巻を度々贈っている。今はもう、東松山名物の紫蘇巻というのは残っていないが、高村が喜んでる様子は興味深い。